横浜グランドタワー23階にカジノが出来てから十年が経った。もちろん、賭博施設ということで良くない話も聞くが、そんな噂も耳にせず、毎週日曜、俺は足繁く通う。もう顔馴染みになってしまった受付に行き、会員証を出すと、奥の部屋に案内される。そこでヘッドギアを装着し、5分くらい経つとチップを受け取る。このチップには俺の幸せが詰まっている。幸せを賭けてゲームをするのだ。チップを手に持って、仰々しくレッドカーペットで飾られた会場へ足を踏み入れた。今日は、かなり絶好調だった。いつも通りにポーカーのテーブルに居座るのだが、やけに手札が良かった。5ゲーム中にフラッシュが2回も揃うのはかなり幸運と言えるだろう。二つ隣にいた高そうなスーツの男も苦虫を噛み潰したような顔を隠せていなかった。調子に乗って一気に崩れてしまわぬうちにと、受付に戻った。

「交換をお願いします」

チップを渡すと、店員が奥に引っ込んだ。暫くすると、俺も呼ばれて、行きと同じようにヘッドセットをつけるのだろう。こうして幸せを頭に流しこみ、チップを換幸する。来たときよりもほんの少し幸せになってカジノを出るはずだった。店員に呼ばれて通された部屋は、普段とは別のところだった。清潔感を感じさせることには変わりないが、どこか冷徹な空気が産毛に触れている。吸い込んだ空気に味はしないのに、息をするたびにえづきたくなる不快感が漂う。通ってきたドアに鍵がかかる音がすると、まるで取り調べでもするような空間が完成した。パイプ椅子に座らされ、目の前には店員が

1

立つ。
「なあ、あんた」
その強い語気は、先ほどの店員と目の前の人物が同一人物だとまるで感じさせなかった。
「このチップ、あんたのじゃないな。誰から取った」
その手には黒いチップが握られていた。
「誰って、分からないな。俺は勝負に夢中だった。いちいち相手の人相なんて覚えていない」
「頼む、思い出してくれ。監視カメラじゃ確認できない。あんたの記憶だけが頼りだ」
「そう言われても、分からないものは分からない。ただ、俺は今日、ポーカーしかやってなかったからそのテーブルにいたやつから取った」
「……そうか、ありがとう」
店員は口惜しそうに言った。
「何故、わざわざチップの元の持ち主を聞くんだ?今までそんなことはなかった」
「少し、気になることがあった」
「何が気になった」
「個人的な話だから、気にしないでほしい」
「そう言われると余計に気になる」
「とにかく、あんたは帰って良い。引き止めて悪かった。このことは内密にしてくれると助かる。今更だが、少し突っ走ってしまった」
「何か訳ありか」

「何か訳ありだ」

そうして部屋を出されて、帰路についた。交通費が惜しくて、いつも家から徒歩でここまで通っているが、30分位い運動だと割り切っている。家まであと5分か、というところで明日の朝食を調達するためコンビニに入る。菓子パンを買って出てきたところで、目の前に男が立ち塞がった。

「失礼」

そう低い声で俺に話しかけた男は、黒のスーツを身につけて夜の町と同化していた。

「あなた、今幸せですか？」

こんなところで宗教勧誘か。わざわざ人の進路を塞ぐようにしてタチが悪い。

「すみません、急いでいるので」

適当に言って逃げ切れる、と思っていた。

「あなたの幸せ、もらいます」

男はそう言って俺の腕を掴むと、路地裏まで連れ込んだ。そして俺の頭に、見覚えのあるヘッドセットを無理やり装着した。何をされるのか察して、思い切り頭を縦横に振る。それが運良く男の顎に当たり、怯んだ一瞬の隙に逃げ出すことができた。ヘッドセットを投げ捨て、全力で走っても、まだ男は追いかけてくる。再び男に捕まりそうになったとき、急に目の前の彼が仰向けに姿勢を崩した。その陰から、もう一人の男が姿を現した。マスクとサングラスで、人相は分からない。マスクの男は俺の腕を掴むと、スーツの男から離れ、車に乗りエンジンをかけた。俺は後ろの席に座らされ、

「見つからないように、窓に顔を近づけないように」
と添えて、車を出した。その声は、直近に聞いた覚えのある声だった。
「助けてくれたのか」
「まあな」
「ありがとう」
「どういたしまして」
しばらく道なりに進んだところで、マスクの男は口を開いた。
「家はあの辺りか」
「まあ、近い」
「今日はビジネスホテルに泊まるといい。近くの駅まで送る」
しばらく時間が経ち、駅のロータリーまで車は進んだ。
「じゃあ、気をつけて」
「なあ、あんた、カジノで店員やってたか？」
すると、男は呆れたように
「会ってすぐなのに、よく分かるな」
と言った。
「なんで俺が襲われて、すぐに助けに入れた？タイミングが良すぎる。お前、何か知ってるんじゃないのか」
「俺は何も分からないが、多分カジノが一枚噛んでる」
やはり、あのカジノか。ヘッドセットはカジノで見たものだった。しかしそうなると分からないのが店員だ。カジノの目論みをわざわざ店員が邪魔するものだろうか。
「なあ、カジノの周りでよく人が倒れてるって話、知ってる

か？」

　店員が俺に話しかける。

「いいや、初めて聞いた」

「お前みたいに襲われたやつが何人もいんだよ」

「何故そのことをお前は知ってるんだよ」

「それがカジノの本来の目的だからだ」

　一体どういうことだ。確かに客は金を賭けることがないからカジノの親は儲けを出せない。しかし、人から幸せを奪い取ってどう利益に換えるつもりか。店員は続ける。

「ああやって客の幸せを無理やり奪ってるんだ。取って何するんだってまでは、まだ調べ中だ」

「だとしたら、なんでカジノの店員のお前がその邪魔をする？」

「俺は、あのカジノに一泡吹かせたい」

「企業スパイみたいな？」

「いや、もっと個人的な理由だ。復習だよ。親父がカジノに殺されたんだ」

　店員の父親が殺された。カジノに？カジノで殺されたなら話は分かるが、カジノが犯人となると分からない。そもそも人が幸せを奪われたくらいで死ぬとも到底思えない。

「それで、あんたは親父の仇を打とうとしているのか？」

「そういうことになる」

「じゃあ、さっき俺を襲ってきたやつが犯人とかじゃないのか？」

「違う。親父を殺したのは別の奴だ。とにかく、ここまでだ。

まだ命が惜しかったら、詮索しないことをお勧めする」

そう言って店員は俺を車から下ろし、夜道へ消えていった。俺はテールランプを見送ることしかできず、駅近くのビジネスホテルで一夜を明かした。

それから、俺はカジノの周りで人が倒れてる、という噂について調べることにした。実際にニュースで報道されたわけではなく、SNSから広まったらしいということが分かった。「カジノ　横浜　都市伝説」で検索すれば、少し下の方にその手の話題が出てくる。しかし、実際に襲われた、という話は出てこない。とすると、一時期カジノ周辺で酔っ払いが大量発生したか、襲われた人たちはSNSに投稿することすらできない状態であるのだろう。

カジノの一件から2日ほど経った日、そう言えば職場の同僚にもカジノに通っている奴が他にもいたことを思い出し、話を聞くことにした。幸運なことに、その二人も日曜日にカジノにいたらしい。松原は最近カジノに通い始めて、日曜日は夕方からカジノに行き、夜になって施設を出たと言っていた。佐久間はカジノができた当初から通い詰めるヘビーユーザーで、日曜日は朝から夜遅くまでカジノにいたらしい。とんでもないギャンブル狂いである。二人とも、噂のことは初めて知ったらしい。もちろん今まで帰り道で不審者に遭遇したり、倒れている人も、酔っ払いを除き見たことはないと言う。

「急にそんなことを聞いてどうしたんですか？」

そう聞いてきたのは松原だった。同僚にもタメ口ではなく

敬語を混ぜる、生真面目な奴だ。

「いや、最近あの辺りに不審者が出たからな」

「ええ？カジノの周りにですか？危ないですね。館林さんも気をつけてください」

「襲われた後に、言われてもね」

「被害者なんですか？だったら警察に通報した方がいいと思いますけど」

そう言えば、そうだ。俺は噂を調べるのに夢中で、通報なんてことをしていなかった。取り合ってもらえるか分からないが、次の土曜日、警察署に行くことにした。

「不審者の話は知らないが、あのカジノちょっと怪しいぜ」

そう言ったのは佐久間だ。彼は続ける。

「入会費と年会費だけであの施設の採算が取れるとは到底思えない。きっと裏で謎の組織が資金を出してるんだ。世界を支配する気だぜ」

「お前の陰謀論はもう聞き飽きたよ」

論理の飛躍も甚だしい陰謀論を一蹴して、それぞれの業務に戻った。週末、土曜日は熱がでたため予定が日曜日にずれ込むことになってしまった。

そして日曜日、俺は懲りずにカジノに来ていた。本来ならば先に警察署に行くべきだろうが、やらなければいけないことより、やりたいことを優先する悪癖がここで働いてしまった。受付に行くと、すっかり目に焼きついてしまった顔があった。

「一つ、あのときのことで、聞きたいんだが」

「今仕事中でな。終わってからでいいか」
「ちょっと今日は用事があって早めに出ないといけないんだ。今でいいか？」
「じゃあまた今度にしてくれ」
それならば仕方ないと、俺は奥でポーカーをひとしきり楽しんだ後、いつもより早めに出て警察署に向かった。ランドマークの2つほど隣に警察署があって助かった。というより、このくらいの立地でないと、治安を悪化させるであろうカジノは到底許可できないといったことだろう。俺は早速警察に被害届を提出した。そのとき、不審者に襲われて、助けられた旨を伝えたところ
「どなたに助けてもらったのか、覚えていらっしゃいますか？」
と聞かれた。俺は正直に、カジノの店員に助けてもらったと答えた。それから
「その店員が、『自分の父親がカジノに殺された』なんて言っていましたが、何か事件でもあったのですか？」と付け加えた。そのとき、警察の表情が明らかに変わり、
「いいえ、事件なんて、何も」と突き放すように言い放った。その後そそくさと帰されてしまった。産毛が逆立ち、焦燥感が体を包み込む。冷や汗で手がぬめり、口元にほんのり塩味が残る。俺には、何か取り返しのつかないことをしてしまったのだろうという、おかしな確信があった。先ほどの会話のターニングポイントは、カジノの店員。あいつだ。あいつのことを話してから明らかに態度を変えた。きっと不審者の鍵

を握っている。いや、もしかしたらあの不審者はあの店員がけしかけたということも考えられる。カジノで利益を上げ過ぎたり、イカサマをした輩を暴力で抑えつけ、カジノの利益を維持する、なんて出来すぎたお話だろうか。

俺は少し考えて、回れ右をして、カジノにもう一度向かった。自分の身の安全を早いところ確保したいというのもあるが、ことの顛末が気にならないと言ってしまえば嘘になる。ランドマークに入ろうというところで、後ろ側から警察官らしき人影が複数、建物に入って行くのが見えた。仕事熱心なのは結構なことだが、行動が早過ぎる気もする。別に人が何人か死んでいるわけでもなかろうに、夜道に現れた不審者に何人も緊急でリソースを割くものだろうか。

エレベーターに乗り、23階を目指す。目的の階でドアが開いて、最初に目に映ったのは、複数の警官と、他の店員に取り押さえられる彼だった。やはりあいつが捕まったか、と安心したのも束の間、彼の頭に見覚えのあるヘッドセットが付けられているのが見えた。彼は犯人じゃない、被害者だ。俺はもみくちゃになっている人の塊に割って入り、彼の腕を引っ張って脱出した。待て、という怒声と共に何人かが追ってきたが、彼の頭のヘッドセットをとって投げつけ、怯んだ隙にエレベーターへ乗り込んだ。

「大丈夫か？」

「おかげさまでな」

口がきけるようで助かった。あのときの不審者と同じ手段を使っているのだ。人の意識を奪うくらい容易いだろう。

「あんた、なんで襲われてんだ？」
「こっちが聞きたいよ。まさかとは思うが、お前何かしたか？」
「警察に不審者のことと、お前に助けられたことを話した」
「他には？」
「お前の親父がカジノに殺されたってこと」
「それだ」
「……言ったらまずかったか？」
「まずかった。俺も忠告しておくべきだったよ」
応酬を終えるとエレベーターのドアが開き、奥から増援が追ってくる音がした。出口に全力で向かい、駅まで走る。駅前でタクシーを捕まえ、品川まで走らせた。警察に追われている以上、一刻も早く神奈川県から出たかった。
「なあ、ちょっと前から聞きたかったんだけど」
タクシーの車内で、俺は店員に話しかけた。
「何だ？」
「あの黒いチップで、俺はあんたに突っかかられたわけだけど、どういう理屈だ？訳がわからない」
「それか。まず、チップの仕組みを理解してもらう必要がある」
彼から受けた説明はこうだ。まず、幸福をチップに換えるとき、本人の記憶から幸福の総量を計る。そこから、幸せ、という感情を取り出し、データとしてチップに保存する。このとき、幸せは記憶に結びついているため、その記憶もコピーされ、チップに残る。

「で、ここから肝心な話なんだが、チップを幸せに戻すときに、元の幸せの持ち主の記憶も見れてしまうんだ。パソコンの画面で、動画みたいにな」

「その記憶が、あんたの中で引っかかったと」

「突っかかったのは、申し訳なかったがな」

彼は続けた。

「その記憶の中に、お前を襲った不審者と同じ奴が写っていた。それで、そいつが持っていたヘッドセットは、今カジノで使われているやつと形が違う」

「そんな細かいことまで、よく分かるな」

「その記憶の持ち主が、不審者と協力していたみたいでな。それで、あのヘッドセットは一般には流通していない。今日、俺がカジノの店員に襲われたことからも、あの不審者はカジノの関係者の可能性が高い」

かなり面白い推測だ。問題はところどころあるが、中でも見過ごせないほど大きな問題が一つある。

「カジノの従業員は、施設の利用が制限されているんじゃないか？だったら、幸福を奪っても、自分のものにできないから、幸福狩りをする動機が薄いと思う」

「なら、指示役が他にいる。カジノ関係者に集めさせた幸福を自分のものにしようとする指示役が」

指示役がいるならば、それはどのような人物で、どこに潜んでいるのか。それをあのチップ一枚分の記憶から探れというのか。小さなプラスチックの板一枚にどれほどの情報が詰まっているのか知らないが、犯人に繋がる証拠があるとは考

えにくい。
「なあ、本当に覚えていないのか？あのチップの持ち主を」
そう促されて記憶を辿る。こういう時こそ、画面に映像として記憶を映し出したい。テーブルに座り、カードが配られ、自分の手札に目を通し、隣には、
「左隣りに松原、右には高そうなスーツの男が座っていた」
文字通り搾り出した情報を彼に伝える。
「高そうなスーツ？オーナーか？」
「オーナー様が呑気にポーカーなんか遊んでる暇があるのかよ」
「うちのオーナーはよく店に来るんだ。本当はダメだが、黙認状態だ。市議員だしな」
とりあえず、連絡がつきそうな松原に接触することにした。
「もしもし、松原か？」
「もしもし、あ、館林さん。どうしたんですか？」
「休日に悪いな。ちょっと聞きたいんだが、先週の日曜日の午後１０時頃、どこで何をしていた」
隣の奴に聞いたところ、昨日俺が襲われたのはそのくらいの時間だったらしい。
「その時間なら、佐久間さんと一緒に出て、コンビニに寄ってたと思います」
「ありがとう、佐久間にも聞いてみる」
「なんか事件の捜査みたいですね。何ならコンビニの監視カメラまで調べちゃってください。二人とも写ってるので」
自信たっぷりにに茶化してくれる。佐久間にも同様の質問

をしたが、同じ答えが返ってきた。俺が襲われたのは一人だったから、二人がグルでない限り、白だ。

「残るは、オーナー様だな。どうする？簡単には接触できないぞ。」

「忍び込む」

「まさか、オーナーのお宅に？」

「いいや、カジノに」

これまたどうして。遊びに来たところをひっ捕えるつもりだろうか。店員は続ける。

「オーナーはちゃんと幸福が奪えたか自分の目で確認したいはずだ。多分」

「多分だと？」

「あの黒いチップの記憶に写っていた装置、多分新型だ。その動作テストも兼ねてるはず。だったら自分でその性能を確認しに来るはずだ。現状、記憶はカジノにある装置でしか見れないからな」

俺たちは品川で適当に時間を潰して終業後のカジノに忍び込むことになった。夜、全ての従業員が退勤したのを見計らって、俺たちはカジノに入った。店員の名札が鍵になっていて、隣のやつは勤務中の姿のまま逃げ出してきたので、鍵を簡単に開けることができた。

「ここで帰ってくるのを待とう」

そして俺たちは、チップを換幸するための部屋で待ち伏せすることにした。１０分経ち、２０分経ち、３０分経ったところで、オーナーは現れた。黒いスーツに身を包み、二人、

おそらく実行犯を引き連れて部屋に入ってきた。オーナーは二つのヘッドセットとパソコンを繋ぎ、画面を見始めた。きっと記憶を見て、幸せが奪えているか確認しているのだろう。その隙を見て、俺は飛び出し、後ろから羽交い締めにした。

「何だ、お前は」

「お前だな、指示役は」

そう言った後、実行犯二人が俺を引き剥がそうと襲いかかってきたが、店員が二人を突き飛ばした。そしてドアを閉めて鍵をかけた。その間に俺はオーナーを椅子に座らせ結束バンドで手足を固定した。店員がヘッドセットに触れるとオーナーが

「触るな」

と叫んだ。

「それは最新技術の結晶だ。数々の実験を繰り返し、人から幸せと記憶を抽出することがついに叶ったんだぞ」

「記憶も？どういうことだ」

そのとき、店員が口を挟んだ。

「幸せは記憶と結びついている。まさかその記憶をコピーするだけでなく、奪えるように装置を改造したのか」

「そうだ。そして換幸する機能を使い、幸せを奪われたこと自体を幸せと結びつければ、その記憶も奪えるようになる」

「その技術を完成させるために一体何人の幸せを犠牲にした」

「礎になったと言ってほしいね。幸福の管理社会の。全ての人間に幸福が与えられれば、争いなど全て消え去る。そんな

素晴らしい世の糧になるんだ。お前たちもな。誇りに思うがいい」

「犠牲の上の幸せなど、真の幸福と呼べない。貴様のくだらない計画のために親父は死んだのか」

そう言って店員は、オーナーの肩を掴んで思い切り揺さぶった。すると、胸ポケットのあたりからカラカラと乾いた音が鳴る。

「何を隠している」

そう言って店員は胸ポケットを弄った。出てきたのは1枚のチップだった。

「このチップは何だ」

そう言ってパソコンにそれを読み込ませた。画面には路地裏が映る。オーナーと、他の人物が何かやり取りをしている。オーナーがそいつにヘッドセットを被せ、しばらくすると金銭を受け取っていた。

「お前は幸福を転売している。その利鞘でカジノを運営していたんだ。争いのない世界など、綺麗事を言って結局自分の利益しか目に映らないゴミが」

店員の罵倒は最高潮に達していた。そのとき、パソコンの画面が切り替わる。映像の一人称の人物がヘッドセットを被せられている。目の前には、オーナーの顔があった。そして、映像に水面がアップに写る。水底に視点が移り、段々と余白が大きくなっていくなか、一瞬だけ、幼い頃の店員の笑顔が写り、映像は泡と消えた。

「そんな……親父」そう呟くと店員は、真っ暗になった画面

の前に立ち尽くしていた。
「何で、これを処分しなかった」
俺は静かにオーナーに聞いた。
「売れると思ったんだ。最期の幸せが。だが装置がオーバーフローを起こして、どうも上手くいかなかった。今の今まで諦められなかった」
俺は、死人とその息子の代わりにオーナーの顔面を殴った。
後日、俺は喫茶店であのときの店員、上島とコーヒーを飲んでいた。
「オーナーを警察に突き出したまではいいが、あれで逮捕できるのか？」
「さあな。神奈川県警には、あいつの息がかかってるだろうし難しいかもしれん。そもそも、あの映像が証拠として認められないかもしれないしな」
俺の質問に上島は淡々と答えた。
「でも、カジノはしばらく営業停止だ。もう動くこともないだろう。それでもう、いいよ」
そう言う上島は少し満足げな顔をしていた。俺は質問を重ねる。
「ずっと気になってたんだが、あんたの親父、何者だ？」
上島は一息おいて、話し始めた。
「俺の親父は市議会議員だった。あのオーナーの真の狙いをどこからか掴んで、それを防ぐためにカジノ建設に反対していたんだ。だがそれで、あのオーナーに殺された」
「じゃあ最初からオーナーが犯人だと分かっていたのか？」

「いいや。でも確実にカジノ関係者だろうとは踏んでた。あんた、館林さんだっけ、いてくれて助かったよ。ありがとう」

ありがとうと言うくらいなら、ホテル代を補填してほしいと口から出そうになったが、コーヒーと一緒に飲み込んだ。